

SET KEN

2026
June

newsletter no.58

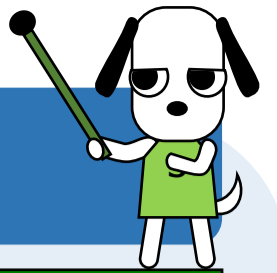
特集！

「地域生活とコミュニティに関する調査2024」
ローデータ公開しました！



おかげさまでせた研は設立20年目になりました。

せたがや自治政策研究所 所長からのご挨拶



プロフィール 大杉 覚(おおすぎ さとる)

せたがや自治政策研究所所長／東京都立大学法学部教授
行政学、都市行政論／東京大学大学院博士課程修了、博士(学術)

- ・総務省地域づくり人材の養成に関する調査研究会座長
- ・自治大学校講師
- ・全国知事会地方自治政策センター頭脳センター専門委員

著書

- ・『コミュニティ自治の未来図』ぎょうせい
- ・『これからの地方自治の教科書 改訂版』共著、第一法規
- ・その他に、雑誌『ガバナンス』連載中

20年目のせた研とこれから～「人づくりを重視する研究所」へ

本年、せたがや自治政策研究所(通称、せた研)は、2007年4月の設置以来、20年目となる節目の年を迎えました。初代所長、森岡清志先生の類まれなリーダーシップのもとせた研は着実に実績をあげ、私が二代目所長を引き継ぐ頃までには、すでに自治体シンクタンクの草分け的存在として、その活動ぶりは多くの自治体関係者から注目を集めるまでになっておりました。森岡前所長やこれまでせた研研究員等として在籍された職員の方々のご尽力はもちろんのこと、庁内外のさまざまな方々からのご支援・ご協力の賜物と感謝申し上げます。

私のせた研との関わりは、森岡先生からのご依頼で、せた研の基幹業務である学術紀要誌『都市社会研究』の編集委員長(第1号～第6号、第7号は編集委員)をお引き受けしたことに始まります。そして、所長としての現在まで、途中中抜けはありますが、この20年のほとんどをせた研とともに歩めたことは私にとって大変光栄なことです。なお、同誌も最新号で18号を数えるまでになり、一流の執筆陣を迎えて構成される特集、若手研究者や自治体職員の登竜門となる投稿論文等、充実した内容を誇ります。近年、世田谷区職員の投稿が途絶えているのが最大の課題ですが。

さて、最近ではクレド(信条)を掲げる自治体が少なくありませんが、それに倣って本研究所もこれまで「開かれた研究所」「頼れる研究所」を掲げてきました。自治体シンクタンクである以上、全庁的な視点から各部署の業務を調査研究面でサポートし、調査研究の成果を区民へと還元することを強く意識して取り組むことが重要だからです。

本年度からはこれら二つに加え、その上位に位置するクレドとして「人づくりを重視する研究所」を打ち出しました。せた研発足の根っこにもある「自治・分権」の理念が、地方分権改革や特別区政改革といった「改革の論理」の役割を果たした時代から、公共私連携のあり方を模索する「共創の実践」を支える時代へと変貌を遂げつつあることを受けてのことです。

ともすると行政の取組みは、部分最適を目指し、良き取組みであっても原子化・細分化されて本来の力を発揮できずじまいになりがちです。今後必ずや世田谷区政にも求められる、せたがや版ジョイントアップ・ガバメントの構築とそれによる着実な「共創の実践」のあり方をじっくり練り上げるための拠点としての役割をせた研が果たしていければと考えます。

引き続きのご協力・ご指導をよろしくお願いいたします。

2026年5月

令和8年度 研究所職員の紹介

次長

氏名

大谷 昇

次長として2年目を迎えました。せたがや自治政策研究所も20年目を迎えて、より一層活動を充実させてまいりたいと思います。皆様のご協力並びにご指導、ご鞭撻いただきたいと存じます。

主任研究員

氏名

担当テーマ

堀江博昭

コミュニティ
せた研ゼミ
ウェルビーイング?

好きなもの

日本酒・きのこ

第一子出生のため育休中。
よりよい区政に向け、ご協力
よろしくお願いいたします。

氏名

担当テーマ

小菌井良太

データ利活用

好きなもの

EBPM

コーヒー

せたアカ

区政に資する研究成果の
創出に向けて精進中。

研究員

氏名

担当テーマ

内海大輔

自治制度

好きなもの

EBPM

タンパク質

せたアカ

開かれた研究所として
情報を発信します！

特別研究員

氏名

担当テーマ

鈴木颯太

町会・自治会

好きなもの

せた研ゼミ

得体の知れないもの！

コミュニティの深淵へ
と足を踏み入れます！

氏名

担当テーマ

戸畑粧子

コミュニティ

好きなもの

都市社会研究

じゃがりこ

せた研ゼミ

地域のつながりを丁寧
に捉えます！

氏名

担当テーマ

西田祐志郎

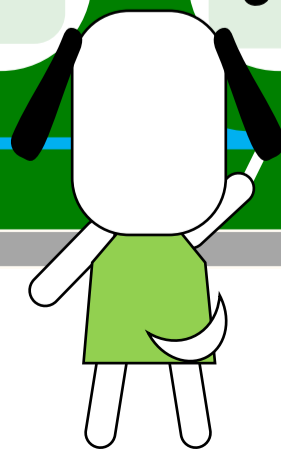
データ利活用

好きなもの

将来人口推計
統計

甘いもの

頼られる研究所となる
よう殉身します！



特集

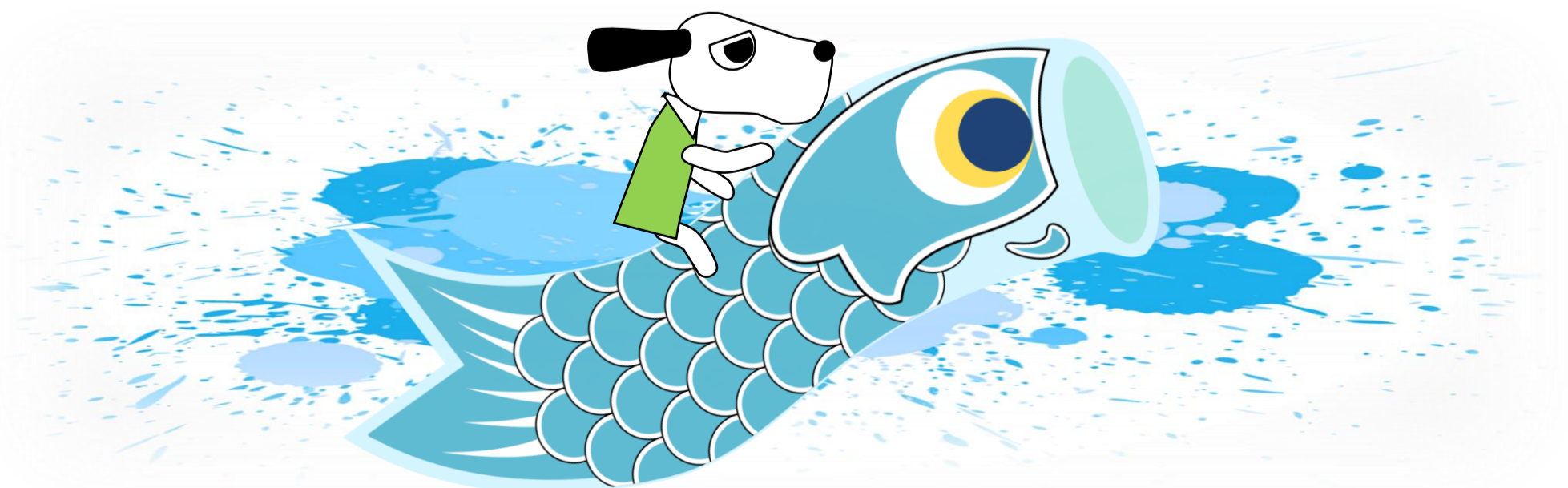
- 01 「地域生活とコミュニティに関する調査2024」ローデータ公開しました！P5
- 02 せたアカ2025開催しました！P6

Topic

- 03 『都市社会研究2026』第18号を刊行しました！P7
- 04 『せたがや自治政策』Vol.17を刊行しました！P8

連載

- 05 社会調査マスターへの道《質的調査編》P9



特集1

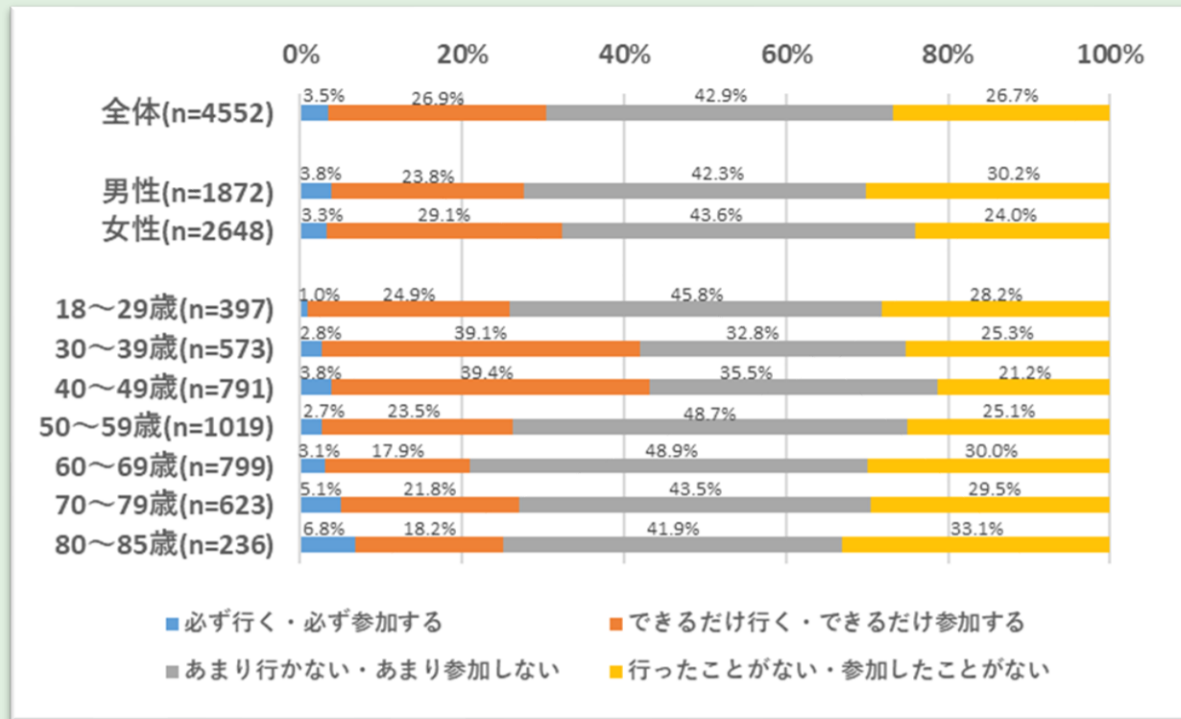
「地域生活とコミュニティに関する調査2024」 ローデータ公開しました！



この調査では区民の方に、地域の中での人付き合いや、地域活動にどのくらい関わっているかをお聞きしています。

例えば…

Qあなたは地域のお祭り・イベントにどの程度参加していますか？



せたがや自治政策研究所は、地域社会における人との関わりや地域活動の実態の把握するために世田谷区民を対象とした「地域生活とコミュニティに関する調査」を2024年に実施しました！この度、調査結果のローデータを[世田谷区HP](#)にて公開しました！

調査目的	地域社会における人との関わりと地域活動の実態の把握
調査期間	2024年10月1日～10月30日
対象者	2024年8月1日時点で住民基本台帳に登録されている18歳以上85歳未満の世田谷区民12,000名(外国籍含む)
有効回答数(率)	4,614件(38.4%)
抽出方法	単純無作為抽出
調査方法	郵送法 (調査票を対象者宅へ郵送で配布・回収する方法)
設問数	55問

調査概要

設問例

Q あなたには、次の(a)～(d)にあてはまる人で、日ごろから何かと頼りにし、親しくしている人はいますか。いる場合はその人数もご記入ください。

(a) 家族・親戚の方 (b) 仕事関係の方 (c) 近所の方 (d) これまであげていただいた方以外の友人

Q お住まいのまちで次の(a)～(e)のようなことが必要になった場合、どのように対応するとよいと思いますか。

(1) 行政サービスによる対応 (2) 住民同士による対応 (3) それぞれの家族・個人での対応

- (a) 災害発生時の避難所での炊き出し
- (b) 子どもが安心して遊べる環境の維持
- (c) 一人暮らし高齢者の日常生活におけるちょっとした手助け
- (d) 乳幼児を持つ親が急用で1～2時間子どもを預ける必要が生じたときの子守り
- (e) まちで親しまれている並木の落ち葉の処理

皆様の所管でも役立つ情報があるかもしれません。気になる方は調査結果を是非ご覧ください！データの見方や分析の仕方でお困りごとがあれば、せた研までご連絡ください！

ローデータを
確認する



本データは、オープンデータとして使用可能です。データの利用にあたっては[世田谷区オープンデータ利用規約](#)をご確認ください。

当日の様子はこちらからご覧いただけます！
※市内のみに公開

Click Here!!



最終回の様子

特集2 せたアカ2025 開催しました！

職層や業務内容を限定せず全職員を対象に募集したところ、子ども家庭支援課、防災街づくり課、みどり政策課など、幅広い領域から計12名の応募がありました！



せたがや自治政策研究所は、EBPMの考え方やデータを活用した政策形成手法の習得を目的とした市内人材育成プログラム「せたがや版データアカデミー」(通称せたアカ)を実施しています。

昨年度は統計教育等で用いられるPPDACサイクルに沿って、問題設定やデータの収集・分析方法などをグループワークや演習を交えて学習するプログラムとしました。

回	内容
第1回	<ul style="list-style-type: none"> ■ ガイダンス <ul style="list-style-type: none"> ・ せたアカの目的について ・ EBPM、ロジックモデル、バックキャスト、PPDACの学習 ■ 基調講演「EBPMが拓く自治体行政の可能性」 講演者：大杉所長
第2回	<ul style="list-style-type: none"> ■ P problem 問題発見について 統計知識やデータの所在など、データ活用の基礎を整理したうえで、現状分析や課題の明確化に向けた方法の学習 ■ P plan 調査計画について 問題が生じる背景や要因について仮説を構築し、仮説を立証するためのデータをワーク形式で検討
第3回	<ul style="list-style-type: none"> ■ D data データ収集について データの整理・収集方法の学習 ■ A analysis 分析について 分析用語の定義を学習し、基本統計量、度数分布表、クロス集計、相関分析といった代表的な分析手法の学習
第4回	<ul style="list-style-type: none"> ■ C conclusion 結果 分析結果の解釈や解決策の示し方の学習 ■ 分析ワーク テーマ「町会・自治会の加入率」 テーマについて問題発見、仮説設定、分析の順でワークを実施
第5回	<ul style="list-style-type: none"> ■ ガイダンス・発表準備 第4回でまとめたワークシートの仕上げ ■ 発表 政策経営部長、せたがや自治政策研究所所長からの講評

参加者からはこんな意見をいただきました！

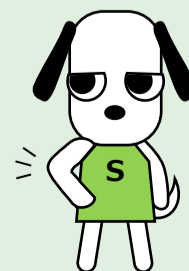


今後、上司への説明や議会への説明で**説得力**のある説明を行うための手段として**統計**の知識を利用できそうだと感じた！

今回出会った方々との**繋がり**も大切に、苦手なりに**挑戦**していこうと思いました！



せたアカは今年度も実施します！
詳細は近日中にご案内します！





『都市社会研究2026』第18号を刊行しました！

せたがや自治政策研究所では、2008年度より学術機関誌『都市社会研究』を刊行しております。この度、「都市社会研究2026」第18号を刊行しました。

本号では、「**気候変動と災害**」を特集テーマとし、有識者による論文を掲載しております。また公募論文として、投稿いただいた都市社会等の分野における論文を査読の上、掲載しております。その他にも、地域活動を実施している団体及び個人からの活動報告を掲載しております。

[区ホームページ](#)で公開していますので、ぜひご覧ください。

・刊行にあたって

松井 望
(学術機関誌「都市社会研究」編集委員長/
東京都立大学都市環境学部都市政策科学科教授)

<特集論文>

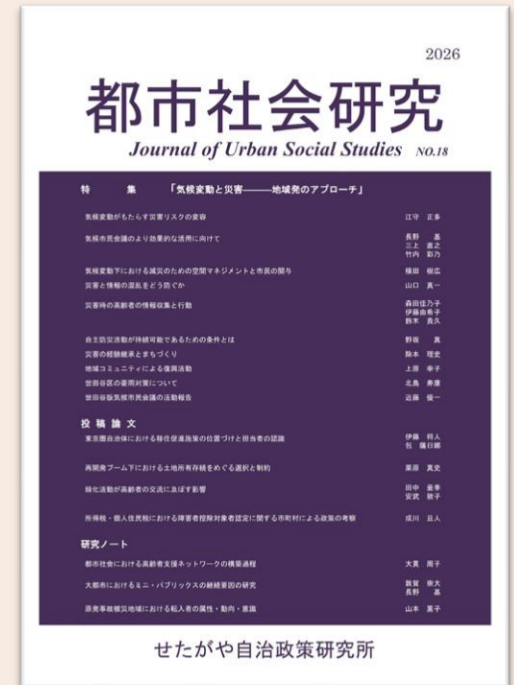
- ・ [気候変動がもたらす災害リスクの変容](#)
江守 正多 (東京大学未来ビジョン研究センター 教授)
- ・ [気候市民会議のより効果的な活用に向けて](#)
長野 基 (東京都立大学都市環境学部 准教授)
三上 直之 (名古屋大学大学院環境学研究科 教授)
竹内 彩乃 (東邦大学理学部 准教授)
- ・ [気候変動下における減災のための空間マネジメントと市民の関与](#)
横田 樹広 (東京都市大学環境学部 教授)
- ・ [災害と情報の混乱をどう防ぐか](#)
山口 真一 (国際大学グローバル・コミュニケーション・センター 教授)
- ・ [災害時の高齢者の情報収集と行動](#)
森田佳乃子 (名古屋大学大学院情報学研究科)
伊藤由希子 (慶應義塾大学大学院商学研究科 教授)
鈴木 貴久 (津田塾大学総合政策学部総合政策学科 准教授)
- ・ [自主防災活動が持続可能であるための条件とは](#)
野坂 真 (青森公立大学経営経済学部 准教授)
- ・ [災害の経験継承とまちづくり](#)
除本 理史 (大阪公立大学大学院経営学研究科 教授)
- ・ [地域コミュニティによる復興活動](#)
上原 幸子 (武蔵野美術大学造形学部通信教育課程デザイン情報学科 教授
/NPO法人 砧・多摩川あそび村 理事長)
- ・ [世田谷区の豪雨対策について](#)
北島 寿康 (世田谷区危機管理部災害対策課災害対策 担当係長)
- ・ [世田谷版気候市民会議の活動報告](#)
近藤 優一 (世田谷区環境政策部環境政策課環境政策 担当係長)

<論文>

- ・ [東京圏自治体における移住促進施策の位置づけと担当者の認識](#) 伊藤 将人 包 薩日娜
- ・ [再開発ブーム下における土地所有存続をめぐる選択と制約](#) 栗原 真史
- ・ [緑化活動が高齢者の交流に及ぼす影響](#) 田中 亜季 安武 敦子
- ・ [所得税・個人住民税における障害者控除対象者認定に関する市町村による政策の考察](#) 成川 旦人

<研究ノート>

- ・ [都市社会における高齢者支援ネットワークの構築過程](#) 大貫 周子
- ・ [大都市におけるミニ・パブリックスの継続要因の研究](#) 敦賀 崇大 長野 基
- ・ [原発事故被災地域における転入者の属性・動向・意識](#) 山本 薫子



第19号
投稿論文
絶賛募集中

詳細は
[コチラ](#)





『せたがや自治政策』Vol.17を刊行しました！

せたがや自治政策研究所では区民の方々や庁内外への情報発信を目的として、研究成果や活動内容の成果をとりまとめた研究・活動報告「せたがや自治政策」を年1回発行しています。

本号は、2024年に実施しました「地域生活とコミュニティに関する調査」の調査結果を用いて地域活動参加者/非参加者の属性把握と地域活動への参加につながる要因の探索、町会・自治会や共同防衛に対する認識、住民と地域の関わりの強さをテーマに調査研究の報告を掲載しております。

[区のホームページ](#)で公開していますので、是非ご覧ください。



・巻頭言

大杉 覚
(せたがや自治政策研究所長/
東京都立大学法学部 教授)

<研究報告>

・「地域生活とコミュニティに関する調査2024」調査報告書

戸畑 粧子 堀江 博昭 鈴木 颯太

・世田谷区における地域活動参加者/非参加者の属性把握と地域活動への参加につながる要因の探索

——「地域生活とコミュニティに関する調査2024」に調査結果を基に——

西田 祐志郎

・世田谷区民における町会・自治会に対する認識と共同防衛に対する意識

鈴木 颯太

・世田谷区における住民と地域の関わりの強さ（コミュニティ・モラル）に関する分析

——コロナ禍後の変化と「人とのつながり」・「行動」との影響について——

堀江 博昭

<活動記録>

- ・せたがや自治政策研究所所有識者懇談会
- ・調査研究プロジェクトの実施記録
- ・せたがや版データアカデミーの実施記録
- ・自治制度研究
- ・庁内外との連携・勉強会
- ・せた研ゼミとの記録
- ・地区を基盤としたデータ整備
- ・次期2か年計画の策定
- ・情報収集・発信（研究活動報告会/学会参加/Newsletter）

<資料>



令和7年度 研究活動報告会

参加してみたいキモチをカタチにしよう
—ともに考える地域参加のデザイン—

令和8年1月20日(火)
せたがや自治政策研究所
<https://www.city.setagaya.lg.jp/kuseijouhou/seisaku/category/11942.htm>

研究報告の内容は昨年度の研究活動報告で発表しました！当日の様子をyoutubeに公開していますので、是非ご覧ください！ 8

連載!

社会調査マスターへの道《質的調査編》

特別研究員：鈴木颯太



雪玉を、見つけて、 押して、転がして

前々回、前回にわたり、明らかにする対象を明確にするための問いを立て、それを事前の勉強によりブラッシュアップする手順を見てきました。

今回からはいよいよ、誰かの語りを手掛かりに、この「問い」に回答していくための手段を考えていきたいと思います。

しかし、誰かの語りを手掛かりにすると言っても、どのような人に話を聞いていけばよいのでしょうか。今回はこの点を考えてみたいと思います。

社会調査では、調査対象者を定めることを「サンプリング」と言います。一般にこのような言い方は、アンケート調査などの量的調査で耳にすることが多いと思いますが、質的調査のインタビューにおいても使われます。

もっとも、そのやり方は、量的調査のそれとは大きく異なるものではありません。アンケート調査などの量的調査で想定される「サンプリング」は、確率論的な考えに基づき、可能な限り対象者一人一人の選定が同じ確率になるように工夫された抽出の仕方が原則です。

他方、質的調査において基本的に前提とされる方法は「スノーボール・サンプリング」などと言われ、これは調査を進めていく中で知り合った人、インタビューに答えてくれた人等に、次の対象者候補を教えてもらったり、紹介してもらったりしていく、という方法です。まさに、雪玉(スノーボール)が転がりながら地面の雪を巻き込み、次第に大きくなっていく、そんなイメージです。社会学者の佐藤郁也などはこれを「友だちの輪を広げていくようなやり方」と表現しています。

それではインタビューの起点となる最初の一人として、まず誰にアプローチすると良いのでしょうか。オーソドックスなやり方としては、前回まで見てきたような事前の勉強と、下調べをもとに、まだ見ぬ調査対象者に見当をつけ、そこからアプローチをしていく方法があります。しかし、既に仕事上でかかわりのある人がいれば、その人を起点できればそれに越したことはないですね。

この点で、行政職員としての立場や経験は、もしかすると有利に働くかもしれません。当然、「スノーボール・サンプリング」に基づけば、これまで職務に当たってきた所管や今いる現場、あるいはこれらで築いてきた人間関係に依るところが大きくなることでしょう。とはいえ、これはすなわち、起点となりうる人と既にある程度の関係性を持っていたり、同僚や上司からこうした人を紹介してもらいやすかったりすることを意味しています。それに職務上で調査を要する場合であれば、普段築いている人間関係をそのまま生かせるのではないのでしょうか。

つまり、行政職員としての立場は、場合によっては調査のとっかかりを掴みやすいポジションかもしれないのです。このようなメリットを生かさない点はありません。

ここまで質的調査、とりわけインタビューにおける「サンプリング」のあり方について見てきました。見ての通り、ここには唯一の正解じみた筋道を想定することができません。調査する環境や、自身が置かれている立場、経験等によって、最終的に出来上がるものが大きく異なることを、予想していただけたらと思います。

しかし、決して消極的に捉える必要はありません。むしろ、このような質的調査の柔軟性を逆手に取り、「自身が既に有している人間関係や経験を、最大限に生かすためには何ができるか？」という視点をもつことで、実りの多い調査を組み立てていくことができるのではないのでしょうか。

【参考文献】

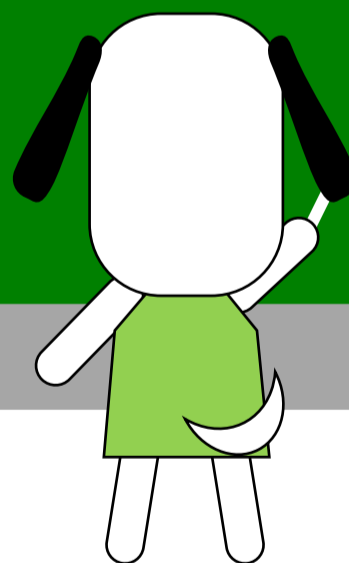
佐藤郁也,2007『フィールドワーク 増訂版 書を持って街へ出よう』新曜社.

ご覧いただきまして誠にありがとうございます
ございました！

よろしければNewsletterについての
アンケートにご協力ください！



<https://logoform.jp/form/JqMJ/1200130>



ぜひホームページもご覧ください！

せたがや自治政策研究所 

<https://www.city.setagaya.lg.jp/kuseijouhou/seisaku/category/11942.html>